世界に冠たる名器
「ザ・シンフォニーホール」誕生秘話 vol.1

「巨大な名器」への挑戦

クラシック音楽専用ホールとして、
1982年に誕生したザ・シンフォニーホール。
その完成までの道のりにあったのは、
開発者たちの並々ならぬ努力と情熱。
当時、ホール設計のチーフとして活躍された
美濃吉昭氏の想いとともに、
ザ・シンフォニーホールが誕生するまでの、
知られざる物語を綴る。

「求めたのは、舞台と客席の一体感」

海外20カ所以上のホール視察を経て選ばれた「アリーナ形式」という形。

ホールに一歩足を踏み入れると、そこに広がるのは、木調のぬくもりあふれる落ち着きのある空間。正面には荘厳なパイプオルガンが堂々と据えられ、1704席と、決して多くはないが、ゆったりとした客席が舞台をぐるりと囲んでいる。

ザ・シンフォニーホールでは、なぜアリーナ形式が採用されたのか？建築当時、設計のチーフを担当した元大成建設株式会社の美濃吉昭氏が当時を振り返り、こう答える。「それまで、日本のホールでは客席の前方に舞台があるシューボックス形式が一般的でしたが、海外の有名ホールの視察旅行に連れて行っていただきましてね…」。

美濃氏の話によると、視察団は、ウィーン、アムステルダム、バーゼル、ベルリン、ニューヨークなど、全部で20カ所以上ものホールを訪ね歩いたという。その中でお手本とされたのが、アムステルダムのあの名ホール「コンセルトヘボウ」。美濃氏は語る。「残響2秒の音は美しく暖かみがありました。それに、アリーナ形式なので、〝オーケストラを囲み、みんなで一緒に楽しみましょう〟という感じで、舞台と客席の一体感が生まれ、より盛り上がる姿を体感しました」。

彼の言葉は、ザ・シンフォニーホールで一度音楽を聴けば、納得できるだろう。舞台背面に座る観客も、舞台正面に座る観客も、向かい合わせになるからだろうか、不思議と一体感が生まれる。ホール中に美しい音が響き渡り、コンサートは盛り上がり、感動の渦に包まれる。指揮者も演奏家も観客も、至福の音楽を楽しめる共有空間、それが、ザ・シンフォニーホールの魅力なのだ。

美濃氏が大切に保管されていた30年以上も前の資料の数々。世界の名だたるホール形態を比較し、ザ・シンフォニーホールに最適なアリーナ形式にたどり着いた。

「ホールとは、演奏家と観客が奏でるもの」

ホール全体で最高の響きを追求した「贅沢を極めたホール」。

ホールの設計で最も大変だったことは、「設計期間の短さ」と、美濃氏は答える。「完成までの期日はわずか2年。地下工事が約1年かかったので、その間に運良く設計を続けることができたんです」。

当時、絶対目標とされた「残響2秒」の音響技術に関しては、意外にも「残響を長くすることより、音のボリュームを美しく保つことと、ホールのどの場所でもエコーをなくすことが難題でした」と美濃氏。「例えば、オーケストラが〝パーン〟という音を出すと、その通りに聴こえなければいけません。壁や天井で反射した音が遅れて〝パパン〟、または〝パパパーン〟などと聴こえることをエコーと言いますが、これをなくすのが大変でした」。

そのために、10分の1に縮尺したホールの模型をつくり、幾度も音響実験が繰り返されたのだという。「ホールの天井、壁、床、椅子など、すみずみまで〝美しい響き〟を追求しています。無駄なものなど一つとしてありません」。

例えば、客席の天井から三角のオブジェが幾つも吊られている。その正体は美濃氏いわく「反響板です。天井は平面ではなく凹凸にしてほしいと音響担当者から要望があったんです。音が天井を舞うように、飛ぶ鳥をデザインしました」。なるほど、まるで音を翼に乗せて、鳥たちが円舞しているようだ。

美濃氏は続ける。「当時、音響を指導された先生は、〝ホールは巨大な楽器である〟とおっしゃっています。音楽家が奏でる音に適切な響きを加え、熟成した音楽として観客に届けるものがホールである、と。しかも、吸音体でもある観客が満席に近い状態の時に、最も美しい音が響きます。だからまさにホールは、〝演奏家と観客が一緒になって奏でる楽器〟そういう想いで設計しました」。

「美しい響き」を追求する工夫がホールの随所に。客席天井には鳥をモチーフにした反響板を採用。舞台上の音響反射板、天井の凸面もその一例。

響きを左右する椅子も木調に。同時に座り心地も追求。

「お楽しみは演奏だけではない。観客も〝主役〟になれる場所に」

訪れることが楽しくなる。ともに、美しい音をいつまでも。

音楽を聴きに行く楽しみは、演奏だけではない。ホールに入るまで、演奏が始まるまでの期待感、休憩中や演奏後の余韻…そのどれもが至福の時間だ。

「ホールに向かうまで、隣がちょうど公園で並木道があり、これと合わせてホールを計画。緑豊かなプロムナードを形成することができました。大きく成長した木々が、ホールの歴史を物語っているようですね」と美濃氏は嬉しそうに語る。木々の間から、ホールの白い外壁が顔をのぞかせ、近づくにつれて、期待で胸は高鳴っていく。正面のゆったりとした石段を昇り、ガラス扉が開き、ホワイエを抜けると、左右に分かれたグラン・エスカリエ（大階段）がある。「ホールは四階にあるので、お客さまが知らず知らずのうちに四階まで足を運べるように工夫しました。だから、大階段の壁には大きな鏡を、天井にはシャンデリアを採用。お客さまにも〝主役〟のような気分を味わってほしかったんです」。

なるほど、星のように輝く豪華なシャンデリアを見上げて歩を進めるうちに、階段を昇っていることをいつの間にか忘れてしまいそうだ。

美濃氏は最後に結ぶ。「思い返せば、ザ・シンフォニーホールの設計ほど貴重な経験はありませんでした。また、数々の賞と栄誉もいただきました。思い入れがある仕事だったからこそ、もっともっと多くの方に、このホールを楽しんでほしいと願っています」。

建てた人の想いが込められたホールの30余年の歴史を大切に。ザ・シンフォニーホールはこれからも、演奏家、指揮者、観客がともに、美しい音を響かせ続ける名器でありたい。

一階のホワイエの豪華なシャンデリア。光が波打ち、まるで階段上を動くように見える。

美濃 吉昭 AE建築設計事務所 代表
元大成建設株式会社 設計部課長として
ザ・シンフォニーホールの企画・設計を担当。

ザ・シンフォニーホールの誕生秘話を
次号でもご紹介します。ご期待ください。